

『イエスは黙っておられた』(要旨)
マルコ 15:1-15 説教者 原田惟座耶

本日の受難日記念礼拝は、「引き渡す」を鍵言葉にして、マルコの福音書 15 章 1~15 節の御言葉に耳を傾けましょう。

1. ユダヤ人の代表とローマの代理人

マルコの 15 章は、祭司長たちがイエスをピラトに引き渡した場面から始まります。祭司長たちはユダヤ人社会を代表する人々でした。すでにユダヤ人の政治と司法の最高法院(サンヘドリン)でイエスは死に値すると決めていましたが、ローマの裁判によって処刑するためピラトに引き渡しました。(マルコ 14:64)

一方ローマの代理人である総督ピラトは、パレスチナ地方(ユダヤ、サマリア、イドマニア)の総督でした。当時のローマ帝国はその地方を統治困難な地域と見ており、総督自身が意思決定を迅速に行えるよう総督に最高の法的権限を与えました。しかしそれは総督自身が決定の責任を負うことを意味していました。

さてピラトは、過越の祭りの期間エルサレムの情勢が不安定になるため、住み慣れたカイサリアを離れエルサレムに待機していました。平穩無事にこの期間を終えたいというピラトの願いを見透かしたかのように、祭司長たちはイエスを連れて来たのです。ピラトは彼らの訴えが不当であると見抜いていました。しかし自らの責任で決定することを避け、イエスが死罪に値しないことを群衆の口によって表明させようと仕向けたのです。ところがその目論見に反し、群衆はイエスを「十字架につけろ」と叫び出しました。

2. イエスは黙っておられた

この騒がしい場面で一人黙っていた人物がいました。今や十字架刑に処せられようとしていたイエスです。大抵の人は自分に不利益を被る可能性がある場合、必死に弁明します。実際にその場を上手く立ち回る人が有利に物事を進め、黙っている人が不利な結果を引き受ける。ピラト自身そうした駆け引きを経て、総督にまで上り詰めたのかもしれませんが。ところがイエスは、自分に不利な証言をされても黙っていた。その姿は、自分の願望を実現するための交渉や声の

大きさによって押し切ろうとする人々と対象的のです。ピラトは、こうしたイエスの姿に驚いたのです(15:5)。

「十字架につけろ。」叫びはいよいよ激しさを増し、ついにピラトはそれを制御することを放棄しました。ピラトは公正を行うよりも自分のキャリアを守ることを優先し、イエスをローマ兵に引き渡すことで事態の收拾を図りました。▷イエスは、自分の立場を優先する人々の心に隠された罪—ねたみ、無関心そして自己中心等—によって「引き渡された」のです。

3. 人知を超えた神のご計画

福音書記者マルコは、こうした人間の罪にまみれたはかりごとを克明に記す一方で、それを超えた神のご計画を読者に伝えます。

この「引き渡す」は、イエスご自身によって語られていた言葉でもありました。

「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。」(10:33)

人々は自分の目的と意図通りに物事を動かしたと思ったことでしょう。しかし神の御思いを知るイエスは、引き渡されることを承知の上でエルサレムに向かわれたのです。神は人間のはかりごとを超え、ご自身の約束を成就されました。

「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」(イザヤ 58:7)

私たちの罪が、罪なきイエスを十字架に引き渡しました。それにも関わらず、屠り場に引かれて行く羊のように「イエスは黙っておられた」。それはご自分のいのちを十字架に引き渡すことで、私たちの罪をその身に負い、私たちを神のもとに立ち返らせるためでした(1ペテロ 2:24~25)。

【勧め】喧騒から離れ、主イエスの十字架の意味を心に覚えよう。